

# 「小児歯科でこれから大切なこと」



九州大学大学院歯学研究院  
口腔保健推進学講座小児口腔医学分野教授

中 田 稔 (なかつた むのる)

●略 歴

1964年	東京医科歯科大学歯学部卒業
1968年	東京医科歯科大学大学院修了（小児歯科学専攻）
1971年～73年	米国NIH客員研究員としてインディアナ大学留学
1979年	九州大学歯学部小児歯科学教授
1988年～現在	国際協力事業団歯科研修コース・コースリーダー
1991年～93年	九州大学歯学部附属病院長
1994年～96年	日本小児歯科学会会長
1997年～01年	九州大学大学院歯学研究院長・歯学部長
2001年～03年	九州大学歯学部附属病院長

21世紀における小児歯科医療のあり方について考える。

私は、これから大切となるであろう3つのキーワードを中心にしてこのことを考えてみた。それは、①少子・高齢社会、②国際化、③地球保護の3つである。

まず①少子・高齢社会であるが、単に小児人口が減少するだけでなく、一人一人の存在感・価値観が相対的に高まることで、生活の質へのこだわりがいつそう強くなる。それは医療の質に対する社会の関心、個人を重視した医療のあり方などを促進する。予防面では、集団から個へと重点が移る。実際に、う蝕の罹患性が低下している背景には、う蝕に関与する要因のうち、環境要因の役割が縮小してきたと考えるのが、最も妥当である。そして個性を決める遺伝要因の比重が高まってゆく。歯科疾患の個体差を決定する要因のうち、環境要因が相対的に低下するにつれ、遺伝要因を重視する医療体系を構築しなければならない。すでに始まっているゲノム計画は、実用段階にあるというものの、歯科における応用性についてはまだ定かでない。とは言え、より遺伝要因に配慮する考え方は、今後の主流になることは確実である。

第2に国際化ということ。これは情報化という問題と同じ次元で捉えればわかりやすい。ITの普及により国民は居ながらにして、必要な情報を世界から瞬時にして簡単に得ることができる。たとえば、予防手段にしても保存修復でも、どんな材料がどのように用いられるのか、世界の進んだところではどうなっているのかを前知識として持ちながら来院する患者さんが、ますます増えて行くものと覚悟しなければならない。インフォームドコンセントの実施は、そんな背景の中で行われる。またグローバルスタンダードの影響にも直面せざるを得ない。すでに、欧米の大学等は、彼らが永年に渡って構築してきた生涯教育カリキュラムと認定基準をアジアの地域に持ち込み、次々とその基準に合格する専門歯科医が近隣諸国に出現している。いつの日か、これら欧米のグローバルスタンダードとわが国の基準とが対比されないと誰に言えようか。わが国には、社会保険制度下での限定枠など特殊な事情があるとはいえ、医療の質に遜色があってはならないのである。われわれとしては、世界に常に目を向けて、よいと思ったら積極的に取り入れてゆく進取の気性を大事にしたい。

第3には、地球保護ということである。科学万能の20世紀に対する反省がいろいろな面で顕在化する。たとえばう蝕の軽症化は化学物質による環境ホルモンの問題をより際立たせる。口腔保健の重みに対する地球社会的問題という、まさに鼎の軽重を問うが如き現象が出現する。そこでEBMが問われる。科学的証拠が弱ければ社会への説得力は失われる。科学研究が進み、宿主側の遺伝的感受性が一層明らかとなれば、予防法や治療計画を個体毎のオーダーメイド方式で患者さんに提供できる。しかし人為的に作られる材料の限界が見えるにつれ、究極的には予防が一番、健康づくりが医療の最先端という時代がいつか実現するのではないだろうか。